

京都国立近代美術館 収集の概要（令和6年度）

京都国立近代美術館は、関西さらには西日本において近現代の美術・工芸を扱う中心的な機関として活動することを目的とし、地域性に目配りしつつも、日本の近現代美術史の核となる作品や、代表的作家の各時代における重要作品を積極的に収集している。さらに、世界における日本の美術・工芸の位置づけを常に考えることを旨とし、その影響関係に係る国外の近現代美術の収集にも取り組み、加えて収蔵作家のジェンダーバランスにも配慮するよう努めている。

令和6年度も、以上の方針を踏襲し、多様なジャンルの作品を収集した。工芸では松田権六の《蒔絵勇馬図平卓》と《蒔絵竹に雀図二段卓》、絵画では鑄木清方《ためさるゝ日》と福田平八郎《雉子（雉）》を購入できたことは特筆に値する。漆芸の松田権六も日本画の鑄木清方も京都の作家ではないが、それぞれの分野の最重要人物であり、その代表作を収蔵することができた。福田平八郎は京都画壇を代表する日本画家ではあるが、国立美術館全体で見てもその円熟期の作品は未収蔵であり、そこを補うことができた。同じく有意義な購入作品として、アーノルド・ギルバート氏旧蔵の写真コレクション計25件(51点)がある。ギルバート氏の写真コレクションについては、京都国立近代美術館は既に1050点を収蔵していたが、今回購入したのは同氏が生前には手放せなかった特に大切なものであり、この収蔵によってコレクションの真価を見せることができるようになった。

重点化領域である現代作家同時代購入の枠では、八代清水六兵衛《RELATION96-B》や小林正和《WIND-4(風-4)》、風間サチコ《McColonialdシリーズ》4点組など18点を購入した。

京都国立近代美術館 美術作品購入一覧（令和6年度）

 = 特別予算購入

1	種別：陶芸 作者名：図案：浅井 忠 (1856-1907) / 制作：四代清水六兵衛 (1848-1920) 作品名：動物園模様四方小皿 制作年：明治後期一大正 材質・形状：磁器・型成型 / 皿 寸法：十二客 (各) h. 2.0 × 8.9 × 7.9 解説：浅井忠の図案集『黙語図案集』に掲載されている図案をもとに四代清水六兵衛が制作した作品。十二客揃いで共箱を伴う。わずかに周囲が立ち上がる磁器の四方小皿に、京都市動物園での写生をもとに考案された動物文が釉下彩の技法で面的に表現されている。 取得額：1,430,000円 展示予定：2024年度法人巡回展「超絶技巧からモダンへ」展（長崎県美術館）で展示済
2	種別：陶芸 作者名：図案：浅井 忠 (1856-1907) / 制作：四代清水六兵衛 (1848-1920) 作品名：大津絵中皿 制作年：明治後期一大正 材質・形状：陶器・轆轤成形 / 皿 寸法：十一客 (各) 2.6 × 17.0 × 17.0 解説：浅井忠の図案集『黙語図案集』に掲載されている図案を四代六兵衛が陶器で表現した作品。轆轤で成形され、高台内に四代六兵衛の印と遊陶園の印が押されている。共箱が伴い、箱書より本来は十二客であったことがわかるが、現在は一客が欠けて十一客となっている。器形は縁を広くとるなど洋皿をもとにした形状である。四代六兵衛の特徴が全面に出た、洋風と和風が融合した優品である。 取得額：2,002,000円 展示予定：2024年度法人巡回展「超絶技巧からモダンへ」展（長崎県美術館）で展示済
3	種別：陶芸 作者名：図案：浅井 忠 (1856-1907) / 制作：初代宮永東山 (1868-1941) 作品名：高瀬川船曳図陶製額板 制作年：1913 (大正2) 材質・形状：陶器・木 / 額 寸法：h. 37.8 × 68.0 解説：浅井忠が図案を担当し、初代宮永東山がその図案を作品化した陶製タイルによる陶板で農商務省第1回図案及応用作品展覧会に浅井の図案と共に出品され褒賞を受賞した作品。24枚の正方形のタイルを組み合わせたもので、周囲を囲う長短四本の杉の木による額装である。高瀬川添いの枝垂れ柳のもと三人の曳き子が縄で高瀬舟を牽引する様子が表されている。 取得額：2,970,000円 展示予定：2024年度法人巡回展「超絶技巧からモダンへ」展（長崎県美術館）で展示済
4	種別：陶芸 作者名：七代錦光山宗兵衛 (1868-1927) 作品名：里芋図大花瓶 制作年：明治末一大正初 材質・形状：陶器・轆轤成形・型成形 / 花瓶 寸法：h. 50.5 × 30.0 × 26.0 解説：七代錦光山宗兵衛の作例としてこれまで知られていなかったタイプのアールヌーヴォー調の花び。轆轤で器形を成形し、その表面に型で成形した里芋の葉や蔓、球根などが立体的に張り付けられている。彩色は釉下彩による。七代宗兵衛はアールヌーヴォー様式であふれていた明治33 (1900) 年のパリ万博を視察しているが、本作はそこでの研究成果が十分に発揮された優品である。 取得額：1,650,000円 展示予定：2024年度法人巡回展「超絶技巧からモダンへ」展（長崎県美術館）で展示済

5	種別：陶芸 作者名：七代錦光山宗兵衛(1868-1927) 作品名：草花虫文様大花瓶 制作年：明治末-大正初 材質・形状：陶器・轆轤成型／花瓶 寸法：h. 54.5×43.0×43.0 解説：七代錦光山宗兵衛の手による「マルホフ式」で装飾された堂々たる大花瓶。模様は菱の葉やバツタなどをモチーフに蔓を渦巻状に配するなど、器形全面に広がりをもって描かれる。また首部と底部は半円形と点で構成された連続模様で装飾されている。モチーフはすべて線刻で輪郭線がとられており、地の赤茶色に対して、輪郭の中を埋めるように緑、青、白、黒系の顔料による釉下彩で装飾されている。全体に光沢を抑えたマット調の仕上がりである。 取得額：1,650,000円 展示予定：2024年度法人巡回展「超絶技巧からモダンへ」展（長崎県美術館）で展示済
6	種別：陶芸 作者名：図案：武田五一(1872-1938)／制作：七代錦光山宗兵衛(1868-1927) 作品名：古代百合模様花瓶 制作年：1912（明治45／大正元）頃 材質・形状：陶器・轆轤成型／花瓶 寸法：H. 41.3×20.0×20.0 解説：建築家の武田五一が図案を担当し、七代錦光山宗兵衛が制作した縦長の花瓶。姉妹作が京都工芸繊維大学に残る。轆轤で成形され、高台内に「錦光山造」の印が押されている。古代の百合が「マルホフ式」の様式で図案化され、釉下彩の技法で表現されている。新しい時代に即した工芸図案を模索した当時を代表する優品である。 取得額：1,760,000円 展示予定：2024年度法人巡回展「超絶技巧からモダンへ」展（長崎県美術館）で展示済
7	種別：漆工 作者名：図案：澤田宗山（誠一郎）(1881-1963)／ 塗：四代岩村哲斎（貞蔵）(1884-1967)／ 蒔絵：岩村光真（真次郎）(1885-1945) 作品名：草花模様漆器書棚 制作年：1914（大正3） 材質・形状：木、漆、蒔絵、螺鈿／棚 寸法：H. 71.5×W. 55×D. 29.3 解説：澤田宗山（図案）、四代岩村哲斎（塗）、岩村光真（蒔絵）による蒔絵、螺鈿装飾による指物の書棚。典型的な「マルホフ式」によるもので、左扉にはユリ科の花、右扉にはホタルブクロの図柄がそれぞれ螺鈿と渦巻く蔓で表現され、下部に植木鉢と思われる幾何学文、また各扉の周囲を連続する蔓草文が覆う。農商務省第2回図案及応用作品展覧会の出品作である。 取得額：2,530,000円 展示予定：2024年度法人巡回展「超絶技巧からモダンへ」展（長崎県美術館）で展示済
8	 種別：漆工 作者名：松田権六(1896-1986) 作品名：蒔絵勇馬図平卓 制作年：1937（昭和12） 材質・形状：木胎、漆、蒔絵／平卓 寸法：11.9(h)×54.2×34.8 解説：「蒔絵」の重要無形文化財保持者の松田権六による平卓。高蒔絵で後方から手綱で引っ張られることに抗うかのように暴れる勇壮な黒馬の姿が表現されている。また、右上には螺鈿と蒔絵で桜が、右下には蒔絵と金銀の平文や箔で槍霞が描かれており、卓の向こうに満開の桜が咲き誇る情景をイメージさせる卓越した図案である。底面に「昭和十二年春 権六作」の銘が蒔絵で入る。 取得額：33,000,000円 展示予定：今後のコレクション展で展示予定
9	種別：漆工 作者名：松田権六(1896-1986) 作品名：蒔絵竹に雀図二段卓 制作年：1968（昭和43） 材質・形状：木胎、漆、蒔絵、撥鏝／二段卓 寸法：27.8(h)×75.2×38.4 解説：「蒔絵」の重要無形文化財保持者の松田権六による二段卓。松田の代表作としてこれまでに何度も紹介されてきた名品。天板では四隅に蒔絵や金銀の平文による槍霞が控えめに表されることで空間の広がりが見え、下段では棚板に放射状に配された笹葉文の中央に象牙を着色した撥鏝の技法で餌を啄む三羽の小雀が表現されている。 取得額：55,000,000円 展示予定：2024年度第4回コレクション展で展示済

10		<p>種別：日本画</p> <p>作者名：鏑木清方(1878-1972)</p> <p>作品名：ためさるゝ日</p> <p>制作年：1918（大正7）</p> <p>材質・形状：紙本着色／軸装</p> <p>寸法：186.8×78.0</p> <p>解説：江戸時代、長崎丸山の花街で行われていた年中行事に取材している。旦那衆が、それぞれ最良の遊女に豪華な衣装や装飾品を着けさせて競い合うもので、ここに描かれる、憂い顔で絵踏みをする遊女も、豪華で重厚な装いをしている。南蛮趣味と、ファム・ファタル的な女性像の流行に影響を受けた、清方には珍しい作例で、作者自身が会心の作としたもののうち、現在その存在が確認される貴重な3点のうちの1点。</p> <p>取得額：60,000,000円</p> <p>展示予定：2022年「没後50年 鏑木清方展」にて展示。2028年ぐらいに公立美術館で開催予定の鏑木清方回顧展に展示予定。また、修復も予定。</p>
11		<p>種別：日本画</p> <p>作者名：田能村小斎（1845-1909）</p> <p>作品名：箕面真景図</p> <p>制作年：明治時代</p> <p>材質・形状：絹本着色／軸装</p> <p>寸法：147.0×72.3</p> <p>解説：多くの文人が作品の主題としたことで知られる大阪の名所・箕面を描いたもので、画面左奥に滝を描き、赤く色づいた紅葉と常緑樹のコントラストが美しい。作品に付随する出品礼状から、1911年11月5日に京都の若王子画神堂および永観堂において開かれた直入先生父子孫追薦會の出品作であることがわかる。</p> <p>取得額：1,100,000円</p> <p>展示予定：次年度以降のコレクション展にて展示予定</p>
12		<p>種別：日本画</p> <p>作者名：田能村直入(1814-1907)</p> <p>作品名：一望萬松図</p> <p>制作年：1890（明治23）</p> <p>材質・形状：紙本着色／軸装</p> <p>寸法：164.5×67.5</p> <p>解説：紙本に描かれた水墨を主体とした作品で、粗い筆致と柔らかな墨線でメリハリをつけて表現することでそれぞれのモチーフを際立たせながらも、画面全体に展開している山肌の擦筆と墨の色が全体の調和をとっている。賛には松伯堂主人・柏原契からの依頼で、同題名作品から着想を得て描いたものであると記される。</p> <p>取得額：1,320,000円</p> <p>展示予定：「仙境 南画の聖地、ここにあり」展（和歌山県立近代美術館）に出品</p>
13		<p>種別：日本画</p> <p>作者名：秦テルヲ（1887-1945）</p> <p>作品名：桃太郎之図</p> <p>制作年：1932（昭和7）</p> <p>材質・形状：絹本着色／軸装</p> <p>寸法：112.9×35.5</p> <p>解説：余白が多いことから明るい画面の作品であるが、モチーフを描く神経質な描線によって、テルヲ独特の退廃的な雰囲気も残しており、テルヲらしい桃太郎図となっている。1932（昭和7）年5月7日～8日にかけて京都商工会議所階上にて開催した作品展の目録「秦テルヲ展覧会目録」には、「42桃太郎」とあり、この作家の作品名としては珍しいものであることから、本作がその作品である可能性が高い。</p> <p>取得額：1,100,000円</p> <p>展示予定：次年度以降のコレクション展にて展示予定</p>
14		<p>種別：日本画</p> <p>作者名：福田平八郎(1892-1974)</p> <p>作品名：雉子（雉）</p> <p>制作年：1967（昭和42）</p> <p>材質・形状：紙本着色／額装</p> <p>寸法：54.5×73.5</p> <p>解説：一貫して写生に立脚した客観的な花鳥画を描き続けた平八郎だが、その画風はかなり変遷している。昭和37年に日展への出品をやめて以降は、平安時代の料紙装飾やシャガール、ゴーガンの作品だけでなく、児童画や古代文明の出土品、デパートの包装紙、テレビの画面など、自らの目に興味深く映ったものを参考に、拘りなく色面を組み合わせたバックへ、単純化された花鳥を配していく。筆あとの残る紫の背景に、真っ赤な地面。その上に艶やかな黒羽と鮮やかな色羽を持つオスのキジが描かれた《雉子（雉）》は、この時代を代表する作品である。</p> <p>取得額：40,700,000円</p> <p>展示予定：将来的にコレクション展で使用予定</p>

15	種別 : 油彩画 作者名 : 加納光於(1933-) 作品名 : 身を伏せよ 制作年 : 1982 (昭和57) 材質・形状 : 油彩画布 寸法 : 193.9×260.6 解説 : 加納光於は、1950年代から70年代の版画ブームのなかで注目された作家の一人。本作は、油彩画制作に着手した1980年代前半の作品で、蜜蠟を含ませた流動性の高い絵具を、水平に置いたキャンパスの上に流し、透明フィルムを近づけて、その静電気力で操りながら描くという独自の手法が用いられている。 取得額 : - 展示予定 : R7年度以降のコレクション展で展示予定。
16	種別 : 日本画 作者名 : 入江波光 (1887-1948) 作品名 : 冬の谿 制作年 : 1929 材質・形状 : 絹本着色／軸装 寸法 : 137.4×41.5 解説 : 淡く、くぐもったような緑青が効果的に使用され、枝やゴツゴツとした岩肌を表現する墨線が特徴となっている。淡い緑青の使用は、大正11年から約1年におよぶ渡欧の後のプレスコ画に影響を受けた時代の名残で、墨線は、盟友・村上華岳の影響を感じさせる。ただし、このような表現手法による墨を主体とした風景画は本作品以外に見つかっておらず、自らの水墨画を模索するなかで描かれた、過渡期の作例として貴重なもの。 取得額 : 2,750,000円 展示予定 : 1〜3年後のコレクション展で使用予定
17	種別 : 日本画 作者名 : 小出檜重 (1887-1931) 作品名 : 松のある山水図 制作年 : 大正期 (1912-1926) 材質・形状 : 絹本着色／額装 寸法 : 35.6×105.2 解説 : 大正・昭和初期の洋画家小出檜重は、洋画(油彩画)を描くなら洋式の生活をしなければならぬと考え、衣食住全てを洋風に改めたほどの「専門画家」だったが、日本画の制作も並行して続けていた。もともと大阪の商家に生まれ、伝統文化に親しんで育ったこともあり、日本画制作によって本来の自分自身へ戻るといった面もあったと考えられる。本作品は渡欧前の作であると見られるが、小出の日本画には稀な密度の高さを示している。 取得額 : 1,320,000円 展示予定 : コレクション展において同じ作家による洋画(油彩画)作品とともに活用する予定である。
18	種別 : 日本画 作者名 : 都路華香 (1871-1931) 作品名 : 龍門図 制作年 : c. 1919 材質・形状 : 絹本着色／軸装 寸法 : 157.0×71.0 解説 : ささまざまな波の表現研究に没頭し、福田平八郎に先んじること20年、鮮やかな緑青や群青により波だけを描いた金屏風を制作した都路華香が、滝においても同様の取り組みをしていたことを想像させる。現代の作品としても通用するボリューム感、色感、躍動感を持ち、時代や国の枠に収まりきらない、それゆえ近年その先進的な画風が特に海外で評価され、主要作品の多くが国内から流出している作者の、貴重な作品。 取得額 : 7,150,000円 展示予定 : 将来的にコレクション展で使用予定
19	種別 : 油彩 作者名 : 青木 繁 (1882-1911) 作品名 : 白壁の家 制作年 : 1909 材質・形状 : 画布、油彩／額装 寸法 : 10.4×14.7 解説 : 青木繁の短かった生涯の中で画業は約15年間しかなかったが、本作品はその晩期の重要作品の1つ。故郷の久留米から東京へ出て画家となり、画壇の異端児として早くから注目を集めた彼は、家庭の事情により帰郷を強いられ、画壇でも徐々に理解を得られなくなった中で、失意のうちに九州各地を放浪した。本作品は、世間の無理解に悩んだその時期にも新たな表現を模索していたことを物語る。彼の幼馴染みである梅野満雄の旧蔵品として古くから知られてきた作品である。 取得額 : 3,300,000円 展示予定 : コレクション展において同じ作家による洋画(油彩画)作品とともに活用する予定である。

20 	種別：陶芸 作者名：八代清水六兵衛 (1954-) 作品名：RELATION96-B 制作年：1996 材質・形状：陶、タタラづくり 寸法：206.0(h)×29.0×195.0 解説：焼成を通じて変形する陶の特性と外部および内部空間を造形に取り入れた八代清水六兵衛の代表作。大型の作品を多く手掛けてきた清水の中でも、本作は特に建築的な作品であり、陶器のパーツをつなげて表されたS字形の空間内に円筒を積み上げた円柱を立てることで、曲線と直線による対比が空間において提示されている。またオパールラスター釉の輝きと作品構造と焼成による面の歪みやたわみが作品に複雑な表情を与えている。 取得額：- 展示予定：今後のコレクション展で展示予定
21	種別：彫刻 作者名：辻 晉堂 (1910-1981) 作品名：寒山拾得 制作年：1955 材質・形状：陶彫 寸法：35.5(h)×47.0×36.5 解説：辻晋堂は1955年11月に京都・丸善画廊での個展ではじめて陶彫を発表したが、この時に発表された2点のうちの1点。絡み合う人物像をデフォルメ、抽象化し残ったエッセンスのみを固く焼しめた土の物質感によって表現したものである。 取得額：3,300,000円 展示予定：今後のコレクション展で展示予定
22	種別：彫刻 作者名：辻 晉堂 (1910-1981) 作品名：東山にて 制作年：1962 材質・形状：陶彫 寸法：68.0(h)×118.0×15.5 解説：辻晋堂の作風は1960年代に入ると扁平な壁のようなものへと変化するが、本作は第5回現代日本美術展に出品された、壁のような陶彫を制作していたこの時期の辻の代表作。京都の東山をモチーフとし、2枚の板を梁のような構造物でつなぐとともに表面に六つの空間を空けている。このような辻の作風は同時代の陶芸家に大きな影響を与えている。 取得額：7,700,000円 展示予定：2023年度の「走泥社再考」展で展示済
23	種別：陶芸 作者名：バーナード・リーチ (1887-1979) 作品名：染付彫絵樹下婦人図皿 制作年：1920 材質・形状：磁器 寸法：3.0×21.0×21.0 解説：1919年に我孫子の窯を火事で焼失した後に麻布の黒田清輝邸内に築窯した東門窯で焼成された作品で、リーチの手によるメモ書きから1920年作であることがわかる。そよ風に吹かれて寝転ぶ女性を表現したもので、線刻には濃い呉須、周囲の景色や皿の縁は少し薄めの呉須で彩色され、その上から透明釉が掛けられている。 取得額：1,650,000円 展示予定：今後のコレクション展で展示予定
24 	種別：染織 作者名：扇 千花 (1960-) 作品名：first frost (初霜) 制作年：1994 材質・形状：雁皮、ラミー、紙漉き 寸法：180.0×420.0×4.0 (展示サイズ) 解説：扇は、1980年代の初めから和紙を素材としたインスタレーション作品を発表し、第15回国際テキスタイル・ビエンナーレ (1992年、ローザンヌ州立美術館、スイス) に入選するなど国際的な評価を得た。本作は、第4回国際テキスタイルコンペティション'94京都の入選作として代表作といえる。漉いた紙や、壁面に写る影などを効果的に用いて、空間との関係性のなかで作品の存在を捉える作風は、日本のファイバーアートの特徴として言及されてきた。 取得額：- 展示予定：2023年度企画展「小林正和とその時代—ファイバーアート、その向こうへ」にて展示済

25		<p>種別：染織</p> <p>作者名：小林正和（1944-2004）</p> <p>作品名：WIND-4（風-4）</p> <p>制作年：1975</p> <p>材質・形状：綿糸、綴織</p> <p>寸法：195.0×194.0</p> <p>解説：本作は、小林正和の出世作となる〈吹けよ風〉シリーズの作品で、1975年のウッチにおける第2回国際テキスタイル・トリエンナーレに出品され、最高賞の文化芸術大臣賞を受賞した作品である。経糸の緩みを正確に計算した緻密な構造設計と、風や波、光や影といった自然現象の素直な表現という、相反する特性の調和的融合は、後の日本の作家によるファイバーアート作品に対する国際的評価の主軸となった。</p> <p>取得額：3,000,000円</p> <p>展示予定：2023年度企画展「小林正和とその時代—ファイバーアート、その向こうへ」にて展示済</p>
26		<p>種別：染織</p> <p>作者名：新道弘之（1941-2024）</p> <p>作品名：おっこちシリーズ No. 6</p> <p>制作年：1987</p> <p>材質・形状：手織布（麻、木綿、芭蕉）、藍染、絞り技法追東風（オッコチ）による独自技法</p> <p>寸法：293.0×139.0</p> <p>解説：新道弘之は、歴史ある藍染の技法を用いて現代的な表現をする日本人作家である。「おっこち」とは、絞り染め技法の名称だが、新道はこれを、布の下に小石を敷いて毛細管現象を利用するなど、独自の技法として応用している。本作のようなタペストリーを多数使い、シンディゴ・ポールを無造作に配置してインスタレーション作品として発表した「シンディゴ・スペース」は、新道の代表的な作品である。</p> <p>取得額：1,000,000円</p> <p>展示予定：2023年度企画展「小林正和とその時代—ファイバーアート、その向こうへ」にて展示済</p>
27		<p>種別：染織</p> <p>作者名：田中千世子（1941-）</p> <p>作品名：擦られた織物—6つの正方形・藍・W（#301、#302）</p> <p>制作年：1994</p> <p>材質・形状：亜麻、絹、木綿、黄土で擦られた織物／2点組</p> <p>寸法：#301：38.5×231.0、#302：38.5×232.5</p> <p>解説：本作は、1984年に発表された田中の代表的な〈擦られた織物（Grinded Fabric）〉シリーズで、95年の個展出品作である。糸を染め、織られた布を地面に広げ、その表面を土やレンガで擦ることで、版としての地面の質感を写し取っている。田中の制作を象徴するのは、「時間を織っている」という言葉であり、作家は「織る行為を、過ぎてゆく時間の軌跡として、1本1本の緯糸が積層され空間化してゆく過程」だと言う。作家は〈擦られた織物〉のほか、〈泥染の布〉〈刷られ擦られた布〉〈浸みゆく黒〉〈袈裟〉という5つのシリーズによって、こうした時間の表現を展開している。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：2023年度企画展「小林正和とその時代—ファイバーアート、その向こうへ」にて展示済</p>
28		<p>種別：染織</p> <p>作者名：富田潤（1951-）</p> <p>作品名：KASURI No. 36：その2 似て非なるもの</p> <p>制作年：1995</p> <p>材質・形状：麻、絹、経緋／2点組</p> <p>寸法：（各）235.0×120.0</p> <p>解説：緋の技法を用い、現代的な表現をする富田の代表作である。本作は「'86富山の美術」に出品された《KASURI No. 36》の「その2 似て非なるもの」として、同一図柄で制作され「'95富山の美術」に出品された。制作の動機として86年の展覧会に際し、大浦信行《遠近を抱えて》をめぐる美術館側の一連の対応において、富田の作品も掲載されていた「'86富山の美術」展の図録が焼却されたことが背景にある。95年の図録によれば「否定されたものを取り返す作業」として、敢えて同じ図柄を制作、出品した抗議表明ともいえる作品である。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：2023年度企画展「小林正和とその時代—ファイバーアート、その向こうへ」にて展示済</p>
29		<p>種別：染織</p> <p>作者名：福本繁樹（1946-）</p> <p>作品名：八大：桔梗・朱色、柚子・藤紫、珊瑚・向日葵、瑠璃色・牡丹</p> <p>制作年：2004</p> <p>材質・形状：綿布、反応性染料、蠟染め、布象嵌／パネル（4点組）</p> <p>寸法：（各）240.0×120.0×6.0</p> <p>解説：蠟染めと布象嵌の技法が用いられた、作家にとって最大のサイズとなる四点組の壮大なスケールを感じさせる代表作。各作品は上下に対となり、全部で八つのテーマにおいて構成されている。図様は無数の細片がらりばめられているように見えるが、焦点を定めると、各パネルの上下の中心から十字に区画を分け、それが周囲に広がっていくように色彩的に構成されている。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：今年度第2回コレクション展で展示</p>

30 	種別 : 写真 作者名 : マシュー・ブラディ (c. 1823-1896) 作品名 : ダニエル・ウェブスターの肖像 制作年 : c. 1849 材質・形状 : ダゲレオタイプ 寸法 : 10.5×7.8 解説 : アメリカでダゲレオタイプ技法を開拓した発明家サミュエル・モースに師事したブラディは、歴代の大統領の肖像写真や南北戦争の戦況を撮影するなど、スタジオ写真家として活躍した。本作は政治家ダニエル・ウェブスターを撮影した貴重なダゲレオタイプ写真である。 取得額 : 1,344,192円 展示予定 : R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。
31 	種別 : 写真 作者名 : ブラッサイ (ギュラ・ハラス) (1899-1984) 作品名 : ポートフォリオ『変成』 (Transmutations) 制作年 : 1934-1935/1967 材質・形状 : ゼラチン・シルバー・プリント (クリシェヴェール) /12点組 寸法 : 解説 : ブラッサイは、写真のほか、文筆や絵画、版画など他の分野でも優れた創作活動を行った。1934年、ピカソとの共同制作に触発され、写真のガラス原板にエングレイヴィングを施す技法「クリシェ・ヴェール」を試し、後年女性ヌードのネガの中から12点を選びこの作品シリーズを発表。キュビズムやシュルレアリスムとの関わりを示すと同時に、フォトモンタージュの延長上の実験的作例としても重要である。 取得額 : 2,230,272円 展示予定 : R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。
32 	種別 : 写真 作者名 : ウィン・バロック (1902-1975) 作品名 : デルモンテの森 制作年 : 1952 材質・形状 : ゼラチン・シルバー・プリント 寸法 : 23.8×19.2 解説 : シカゴ出身のウィン・バロックは、本作品を旧蔵していたアーノルド・ギルバートと親交の深かった写真家で、1950年以降はストレートな表現を探求した。霧のかかった森の植生を精緻な視点でとらえ、深淵な精神性をたたえた一枚となっている。 取得額 : 1,270,352円 展示予定 : R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。
33 	種別 : 写真 作者名 : ウィン・バロック (1902-1975) 作品名 : 難破船 制作年 : 1968 材質・形状 : ゼラチン・シルバー・プリント 寸法 : 26.1×29.8 解説 : シカゴ出身のウィン・バロックは、本作品を旧蔵していたアーノルド・ギルバートと親交の深かった写真家で、1950年以降はストレートな表現を探求した。本作では、砂に埋もれた瓦礫を、海に浮かぶ難破船に見立てている。 取得額 : 1,048,832円 展示予定 : R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。
34 	種別 : 写真 作者名 : ウィン・バロック (1902-1975) 作品名 : 窓の反射 制作年 : 1971 材質・形状 : ゼラチン・シルバー・プリント 寸法 : 17.5×24.3 解説 : シカゴ出身のウィン・バロックは、本作品を旧蔵していたアーノルド・ギルバートと親交の深かった写真家で、1950年以降はストレートな表現を探求した。本作では、窓ガラスに映る景色と実際の景色のイメージの重なりを、繊細な感覚で捉えたもの。 取得額 : 1,048,832円 展示予定 : R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。

35		<p>種別：写真</p> <p>作者名：ロバート・カミング (1943-2021)</p> <p>作品名：イングルウッドの丘、カリフォルニア</p> <p>制作年：1973</p> <p>材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント</p> <p>寸法：18.0×22.5</p> <p>解説：ロバート・カミングは、写真・彫刻・絵画の制作を行い、エド・ルーシェやジョン・バルデッサリとともに西海岸のフォト・コンセプチュアリズムを代表する作家として知られる。本作では、構造物の配置によって、別の風景に見立てて写真に収めている。</p> <p>取得額：1,270,352円</p> <p>展示予定：R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。</p>
36		<p>種別：写真</p> <p>作者名：ロバート・カミング (1943-2021)</p> <p>作品名：カードハウスの列を燃やす</p> <p>制作年：1974</p> <p>材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント</p> <p>寸法：18.0×22.5</p> <p>解説：ロバート・カミングは、写真・彫刻・絵画の制作を行い、エド・ルーシェやジョン・バルデッサリとともに西海岸のフォト・コンセプチュアリズムを代表する作家として知られる。「カードハウス」とはトランプ札で作る不安定な構造だが、カミングは木材に貼り付けた状態で火にくべるトリックを用いることで、写真の虚構性をユーモラスに表現している。</p> <p>取得額：1,270,352円</p> <p>展示予定：R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。</p>
37		<p>種別：写真</p> <p>作者名：ロバート・カミング (1943-2021)</p> <p>作品名：円中心から外れた67度のボディアーク</p> <p>制作年：1975</p> <p>材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント</p> <p>寸法：18.0×22.5</p> <p>解説：ロバート・カミングは、写真・彫刻・絵画の制作を行い、エド・ルーシェやジョン・バルデッサリとともに西海岸のフォト・コンセプチュアリズムを代表する作家として知られる。上体をそらしてできた弧の角度を写真に書き込み、現実の光景をコンセプチュアルに見立てた遊び心のある一点。</p> <p>取得額：1,270,352円</p> <p>展示予定：R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。</p>
38		<p>種別：写真</p> <p>作者名：ダニー・ライアン (1942-)</p> <p>作品名：ポートフォリオ『死者との対話』</p> <p>制作年：1967-69</p> <p>材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント／17点組</p> <p>寸法：</p> <p>解説：ダニー・ライアンは、マグナムに所属するなど、1960年代以降のニュー・ジャーナリズムを牽引した写真家。『死者との対話』は、アメリカ・テキサス州の6つの刑務所を14ヵ月にわたり取材した、記念碑的な写真シリーズ。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。</p>
39		<p>種別：写真</p> <p>作者名：ダニー・ライアン (1942-)</p> <p>作品名：レーサー、インディアナ州シェアアービル（『ザ・バイクライダース』より）</p> <p>制作年：1965</p> <p>材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント</p> <p>寸法：22.2×33.0</p> <p>解説：ダニー・ライアンは、マグナムに所属するなど、1960年代以降のニュー・ジャーナリズムを牽引した写真家。本作は、バイクライダーを取材した写真シリーズの一点。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。</p>

40		<p>種別：写真</p> <p>作者名：ウィリアム・モーテンセン（1897-1965）</p> <p>作品名：ポートフォリオ『絵画的写真』</p> <p>制作年：c. 1930</p> <p>材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント／20点組</p> <p>寸法：(各)22.5×18.0</p> <p>解説：ハリウッドのスタジオ写真家としてキャリアを開始し、独自の写真学校を設立し、多くの写真家を輩出した。レタッチや合成印画を駆使したビクトリアリズムの手法によってグロテスクなイメージを作り上げる作風を特徴とする。本作は、その後求心力を失った絵画的な演出写真の作例集として貴重である。</p> <p>取得額：1,639,552円</p> <p>展示予定：R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。</p>
41		<p>種別：写真</p> <p>作者名：アーロン・シスキン（1903-1991）</p> <p>作品名：アッピア街道、ローマ</p> <p>制作年：1963</p> <p>材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント</p> <p>寸法：34.0×26.7</p> <p>解説：アーロン・シスキンは1930年代ニューヨークでドキュメンタリー写真家として活動した後、抽象表現主義の画家たちとの交流をもち、抽象的な写真表現に転向した。本作では、彫刻の肌理と明暗のコントラストによって、力強いイメージを創り出している。</p> <p>取得額：1,270,352円</p> <p>展示予定：R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。</p>
42		<p>種別：写真</p> <p>作者名：エドワード・スタイケン（1879-1973）</p> <p>作品名：グレタ・ガルボ</p> <p>制作年：1928</p> <p>材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント</p> <p>寸法：42.1×34.0</p> <p>解説：ファッション雑誌『ヴァニティ・フェア』1929年10月号に掲載された、グレタ・ガルボのポートレート。ガルボが出演した映画『恋多き女』の撮影現場で撮影された、スタイケンの撮影したガルボのポートレートとして最もよく知られた一枚。スタイケンは、巧みな照明・演出・技術を駆使することで、芸術写真とセレブリティ、広告、ファッションを融合させ、ファッション写真のスタンダードを確立した。</p> <p>取得額：14,930,752円</p> <p>展示予定：R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。</p>
43		<p>種別：写真</p> <p>作者名：エドワード・ウェストン（1886-1958）</p> <p>作品名：ユッカと岩</p> <p>制作年：1939</p> <p>材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント</p> <p>寸法：24.1×18.9</p> <p>解説：エドワード・ウェストンは、カリフォルニアの写真家グループf.64の一人で、ストレート写真を追求し、被写体の本質に迫る精緻な表現で知られる。本作は、カリフォルニアのジョシュアツリー国立公園の一部であるワンダーランド・オブ・ロックスで撮影された。光と影のコントラストによる岩の存在感と、前景の植物の繊細さが、対比的に捉えられている。</p> <p>取得額：1,270,352円</p> <p>展示予定：R7年度当館でのコレクション展にて展示予定。</p>
44		<p>種別：写真</p> <p>作者名：杉浦邦恵（1942-）</p> <p>作品名：3本のバラ（Three Roses）</p> <p>制作年：1969</p> <p>材質・形状：写真乳剤、グラファイト、キャンバス</p> <p>寸法：97.0×145.0</p> <p>解説：杉浦邦恵は1960年代に渡米してシカゴで写真を学んだ。本作はニューヨークへ移って間もない頃に制作された貴重な初期作品の一つ。モノクローム写真をキャンバスに印画した「フォトキャンバス」のシリーズは、写真と絵画のハイブリッドな関係を提示した実験的試みとして、アメリカ美術界で注目されるきっかけとなった。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：R7年度以降のコレクション展で展示予定。</p>

45		種別 : 写真 作者名 : 杉浦邦恵 (1942-) 作品名 : 50 Cuts : 遺された一瞬 制作年 : 1997-2001 材質・形状 : ゼラチン・シルバー・プリント/50点組 寸法 : (各)12.7×17.8 解説 : 杉浦邦恵は1960年代に渡米してシカゴで写真を学んだ。1980年頃からフォトグラムを制作していたが、スタジオに撮りためていた過去のフォトグラム作品を裁断した100点のプリントによる新作《100 Cuts : 遺された一瞬》を、2022年の個展の際に発表した。本作はその中から作家自身が50点を厳選して再構成したセットである。撮影と裁断の二重の偶然性によって、花のモチーフやドローイングの繊細な線が黒の余白の中で響き合う、豊かなイメージが生み出されている。 取得額 : - 展示予定 : R7年度当館での第1回コレクション展にて展示した。
46		種別 : その他 作者名 : 石原友明 (1959-) 作品名 : Ectoplasm #4 制作年 : 2005-2013 材質・形状 : カラー写真、革/2点組 寸法 : 写真: 140.0×113.0、立体: 135.0×28.0×28.0 解説 : 1980年代の関西ニューウェーブを代表する作家の一人である石原友明は、初期から一貫して、自身の身体に様々な方法でアプローチした「自画像」を制作してきた。本作では、皮革による異形の彫刻が、それを石原が装着したセルフポートレート写真とともに提示される。写真を通して身体の外見（セルフイメージ）と向き合ってきた石原が、内臓や細胞など身体の内部への関心から制作したのが、この皮革の彫刻である。 取得額 : - 展示予定 : R7年度以降のコレクション展で展示予定。
47		種別 : その他 作者名 : 手塚愛子 (1976-) 作品名 : 閉じたり開いたり そして勇気について (拗れ) 制作年 : 2024 材質・形状 : 絹、ポリエステル、ジャカード織、木製パネル 寸法 : 141.5×466.7 解説 : 手塚愛子は、絵画を探求するなかで織物や刺繍に着目し、解体と再構築という独自の手法を用いた作品を発表してきた。近年では既製の織物ではなく、自らデザインしたテキスタイルを日欧の工房に制作してもらい、それを再び解きほぐすというプロセスを採用している。「開いたり閉じたり」というテーマは、作家が長崎の出島を訪れた際に、日本の鎖国・開国の歴史に触れたことで着想したもの。本作は西陣の織物会社との協働によって制作された。 取得額 : - 展示予定 : R7年度当館での企画展にて展示予定。
ほか23点/計70点 購入総額 : 338,616,560円		